

サラマンカ便り その2

—小さな欧州文化都市の伝統と革新

稲賀 繁美

(いながしげみ/国際日本文化研究センター、
総合研究大学院大学)

「白テント」の出現と消滅

11月初旬にサラマンカに到着して、まず目についたのは、尖り帽子の白いテントの仮小屋が、市内のあちらこちらの広場や町角に設営されようとしていたことでした。大きなものではマヨール広場の中央を陣取る、500人収容の巨大なテント。ここでは文字の歴史と題する展覧会。そのほか大聖堂の横のアナヤ広場では「文化」。モンテレミ一宮横のラス・アグスティナス広場では「テクノロジー」をテーマとした「動く森」と称する展示。旧市街西はじの聖フランチェスコ公園東のラス・ウルスラ街では「自然」、またロス・ソリス宮横のロス・バンドス広場では、「スポーツ」。いずれも郵便局の主催で、それぞれのテーマにあった世界の切手を活用した啓蒙的な（あるいは教科書的な）企画。「若き切手愛好の世界展覧会」なる総称がついていて、5つの会場が、旧市街にそれぞれ歩いて5分とかからぬ距離に点在しています。なるほどこういう「赤テント」ならぬ、行政主導の「白テント」もあるか、と感心しました。もっとも、設営にはのろのろと3週間近くかかったのに、展示そのものは17日から24日までの1週間。お伽の国よろしき、かわいらしいテントの群れは、会期が終了するやただちに撤去され、町はふだんのたたずまいを取り戻します。公称では全人口の2倍の25

万人（延べ）の入場者があった、とのことですが、市民たちの反応はというと、いつのまにか始まって、見に行こうかなと思っているうちに、気がつくと済んでいた、という感想が圧倒的。テントにはずいぶん金がかかっているけれど、展示はかなり安直、クリストの梱包芸術でも1カ月は保つのが普通なのに、ずいぶんせっかち。それに代わるは生誕祭の飾りもの。

催しものの案内パンフレットは、市内中央の、通称「貝の家」（壁の表面を巨大なホタテ貝の装飾が蔽っている）の観光案内所などで、月ごとに無料配付されていて、なかなか便利。展覧会、音楽会、演劇などの特別な催しものの予定が、A4判二つ折りの用紙片面にびっしりの盛況ぶり。裏側には会場地図、入場券売り場の案内などが刷ってあり、デザインは無記名ですが、「サラマンカ2002」の記念切手（協賛企業のロゴ込みで数種類発行）とどうやら同一人物・事務所の担当の様子でした。これと同時に、広げると新聞紙大の市街地図（歴史建造物の説明は英独仏西4ヶ国語）を無料配付。徒歩で充分歩ける規模の都市で、この配慮。観光客には親切といえるでしょう。以上が観光局の通常サービスですが、本年はこれに加えて、サラマンカ、ヨーロッパの「文化都市2002」を記念して、欧米各国語によるカラー・タブロイド判30ページほどの催しもの年間案内も入手可能。

また商業誌では『GEO』が「Salamanca universal」という特別号を3ユーロ半で発刊していましたが、これはスペイン語のみの号外扱いかも知れません。

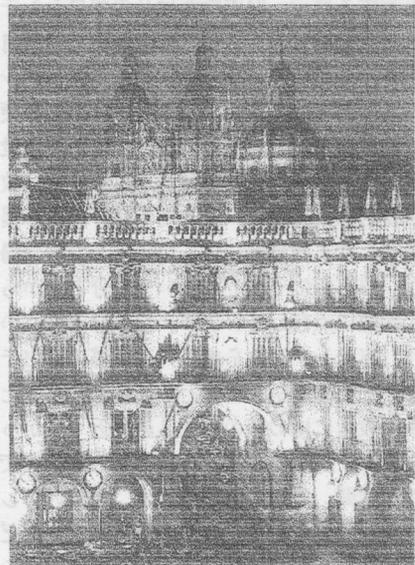
2002年欧州文化都市の物価事情

こうした道具を頼りにすれば、外者でもそれなりにサラマンカの文化生活を堪能できる仕組みで、実際催しものすべてに手を出そうとしても、とても無理。入場料も展覧会の多くは無料、音楽会でも、例えばグレゴリー・ソコロフのピアノ・リサイタル(12月10日)が12ユーロなどというのが、最高額。国立古典劇団の公演なども、特等席でも日本円換算で千円以下。近年ますます値上がり気味の、日本国の催しものの価格狂騒は、どこに原因があるのでしょうか。

というわけで、朝9時から、金曜など夜の9時まで、1日都合7時間授業という過密な勤務日程でなんとかヘトヘトでこなし、後の週末には、ふらりとこうした出しもの見物に出かけます。マグナムとの共催による、アンリ・カルティエ・ブレッソンの写真展は、巨大なサン・エステバン教会近くの、サント・ドミンゴ展覧会場。「食うか、食わぬか」それが問題だ、という食った題名の名品展が、市内東外れのサラマンカ芸術センターで。2002年に旧市街の西部再開発事業として落成した、カスティージャとレオン会議・展示会場では、「戦争中のプロパガンダ」と題して、スペイン内戦期(1936-39)のフランコ政権側と人民戦線側とのプロパガンダ合戦の様子を、当時の機密文書や書簡から、ポスター、出版物、写真(キャバの有名な、狙撃された兵士なども含め)、映画、玩具に至るまで、3階建ての会場に所狭しと展示していて、息が詰まるほど。8本の本格的な専門論文を収録したカタログも12ユーロで販売中。

上の会場は、水木金と、週3度理学部の教室で授業をする際の通り道ですが、月火と出勤する日西センター横のカハ・ドゥエロも、特別展覧会の会場として賑わってい

ました。12月初旬まではクラコフ美術館の所蔵品を中心とした「ポーランド・ロマン主義絵画」展(もちろん入場無料)で、ポーランド近代絵画のおさらい。Jan Nepomucen Głowacki(1802-47)の多くの山岳絵画からWinconty Dmochowski(1807-62)の名所絵風の作風が晩年に急激に写実風に展開するさま。コシューシコのクラコフでの宣誓を描くMichał Stachowicz(1768-1825)の巨大な歴史画から、Piotr Michałowski(1800-55)による、フランツ・ハルスバリーの筆致の、老いた枢機卿の肖像。またパリでシヨパンと親交を結び、その最期をみとったToefil Antoni Jaxa Kwiatkowski(1809-91)の「シヨパンの最期」から壁画「シヨパンのポロネーズ」下絵に至る作品群(平野啓一郎の『葬・送』には登場するのかしら)。さらにArthur Grottger(1837-1867)が戦争叙事詩によってかえって反戦を訴えた、一連の単彩による「リトアニア」まで、そして最後には、フェルナンド・ホドラーにも似た迫力ある装飾性でもって、芥子の野原に座する飛行



マヨール広場 サラマンカ

土姿の女性を描いた Jacek Malczewski (1854-1929) の「Ellenai」(1910)。これなど、一度でよいから萬鐵五郎の「草上の裸婦」(1913)と並べてみたい誘惑にかられました。

スペイン的文化アナクロニズムの実相

毎日の食事でご厄介になっている大司教フォンセカ修道院では、附属のフォンセカ文化センターで、「霊たちの姿—黄金とシャーマン」と題する、コロンビアの黄金装身具の展覧会(これも無料)。なかなか見事な「作品」が、暗黒の会場のなかで、宝石展示を思わせるカクテル光線を浴びて浮かび上がる、極めつきに「美術館」ずれた展示。加えて、アンデスの民の象徴儀礼にたいする皮相なエキゾティズムをかき立てるビデオ解説。人類学調査が植民地時代の延長上で、財宝収奪と癒着してきた過去にはまったく無頓着に、野生の大自然への憧れと、裸の魔術師への好奇心、それに陳腐な異国趣味が、黄金の宝飾へのプチブル的称賛にあっけらかんと結びつく。およそここ20年ほどの民族学の政治性に関する反省などはまったく無縁の文化的後進性、あるいは過去の栄光への単純な依存症丸出しの展示。ほかならぬコロンビアからの留学生のほとんどが、欧州各地の混血とはいえ、比較的富裕な階級出身の、生粋の白人植民者の子孫たちばかりから成るのも、また事実。

その同じ建物のルネサンス式の美しい回廊の横の礼拝堂では、Alonso de. Berguete 作の巨大祭壇を隠すように、Carlos Fortes の絵画、Aquilino Gonzalez による「聖堂の眠り」と題するインスタレーション、Carlos Heras によるビデオ作品「ある影の人生」が開催中。「聖堂の眠り」は、舟形の壁を2枚、聖堂内部に佇立させたもので、東京駅すぐ近くの国際会議場の、あの巨大なガラス張りの側壁を、白い壁で置き換えたミニチュア版、といった風情。サラマンカに限らず、概して現代美術は、会

場となった歴史建築に容易に歯が立たない様子。間借りという屈曲した寄生感は覆い難く、また客の入りも、所詮植民地主義宝飾展の敵ならず。現代ものが時代ものにならない、という現実は、もう少しまじめに考察されるべきでしょう。

13世紀にさかのぼる回廊や歴史的な蔵書で有名な図書館を擁した大学本部のファサードに、通りを隔てて対峙するエスキュラス・メノーレスでは、「エラスムスとスペイン」という反宗教改革を題材とした、なかなか充実して学究的な、文化史の特別展示(これも無料)。ここでも、展示された幾多の歴史文書や出版物の列に疲れて、視線を天井に向けると、太い木造の屋根裏の木組みが、斜めからの人工光線を受けて、見事な骨格をさらしており、その美しさには、息を呑むばかり。回廊にそって何室にもわたる展示を一巡した最後に、ふと会場を見上げると、天球の星座を青灰色の丸天井に美しく描いた、名物の壁画が、不意に出現。

東アジア文化認識の限界

羅列していたのでは、切りがありません。そうしたなか、では東アジア文化はどのように現地の人々に受け取られているのでしょうか。当方がお世話になった日西センターでは、ヴァジャドリッド東洋美術館蔵の日本古写真の展覧が、企画持ち込みで開催中。来歴は不明なものの、典型的な横浜写真の手彩色のお土産写真帳。そうと知っていれば当方も講演のまね事の一幕くらい勤まったでしょうが、もとより主催者と連絡も取れず、ご相談もなし。11月25・26日の両日には、ロスアンゼルス在住で台湾出身のカンフー家、陳 Yun Chung 老師と Hui Liu 夫人とによるデモンストレーションが、センターの階段教室で開催。これも外部よりの持ち込みの企画でしたが、初歩的な型の演技のあと、水墨画と書道の実際をご披露。85歳の老師は、身も軽く、膝も柔らかく、見事な英語(西語通訳つき)で観衆を引

き付け、夫人とふたりで3時間を越す長丁場を悠々とこなされる。鷹の絵に賛を入れるところで、観客のひとりから、それハイクですか、との珍問が出たが、老師はもう慣れっこなのだろう、平然として受け流し、慌てた通訳(大学の中国語講師)が、俳句は日本で、これは中国なの、と急いで事実訂正。

さて、日西センターで八面六臂のご活躍は、無給現地職員の矢島信夫夫妻。その矢島氏の元へ、コレヒオ・ヒスパノ・アメリカノから、クロサワの『七人の侍』(Los Siete Samurais)の上映に先立ち、「サムライ文化」についての講演要請が舞い込みました。『葉隠』から説き起こし、新渡戸稲造の『武士道』を援用しつつ武士の徳目を要約し、さて歴史に目を転ずるや、信長、秀吉、家康の時鳥の歌に触れ、忠臣蔵に及び、新撰組、乃木將軍から神風特攻隊、それに三島由紀夫に至る、スペイン語での見事に明快な発表(11月21日)。50名を越す聴衆からは、1分も続く惜しめない拍手が贈られました。武士道への需要、大したもののです。

続く質疑応答には、ジェイムズ・クラヴェルの『ショーグン』の、もう20年近く前になるテレビ放映を見たが、あれは歴史的にどこまで正しいのか(もちろん、あれはウィリアム・アダムスの事績に取材したもので、歴史的正確さの検討は、忠臣蔵気狂いのコロンビア大学教授ヘンリー・スミス氏に、学術的な検討を加えた教科書があります。でも、そんなこと、講師でもない当方が指摘する柄にもなく)。また、クロサワ映画は本当の日本ではなく、シェイクスピアの翻案だと聞かすが、自分には納得が行かない。講師のご見解は、とのお尋ねも。かつての企業戦士、「24時間闘え」るジャパニーズ・ビジネスマンの鑑たる矢島さんは、和服姿で壇に立ち、武士道の精神は今でも日本人の血に脈々と流れていると、自分は確信しております、と啖呵を切って、

見事でした。でも、この聴衆を相手に、おりからNHKの<人間講座>に登場した笠谷和比古教授の『武士道の思想——日本型組織と個人の自立』への批判的見解を論ずる、というのは、とても無理な相談。ちなみに、講演会の広告の図柄は、岳飛將軍の英姿(つまり、日本でなく中国の英雄!!)でした。

市内の映画館では、ミヤザキの『チヒロの旅』などと並んで、『カムチャッカ』が上映されていました。「アルゼンチン映画のミダス王」との異名を取る、Marcelo Piñeyro監督の作品(2002)。ピノチェト將軍の軍事独裁下の一家族の運命を、10歳の少年(Mathias del Pozo)の視点から淡々と描いた、それだけに痛切な佳作です。逮捕を覚悟した父親(Ricard Darin)は息子に「カムチャッカに行く」とだけ言い残して出発し、もはや二度と戻りません。「カムチャッカ」とは、父子が興じた陣取り合戦の、最後の攻略地点でした。少年にとって、現実のカムチャッカの在りかなど、想像もつかない。ましてやそれが大日本帝国の北方領土として、政治的な色彩を帯びていた地名であることなど、当地の観客にとっては、知られざる史実です。スペイン語圏にとって、極東・沿海州がいかに遠い僻地か、痛いほど納得が行きました。

(サラマンカにて 西暦2002年12月16日 迷亭拜)

【補記】

ひたすら雅びや幽玄、詫び・寂びに純粹な好奇心を示し、あとはブシドーとサムライ文化。一部学生(なぜか南米からの留学生が多い)はJapanimationに開眼。こんな客層を相手に、2ヵ月間、日本文化論を説いてみましたが、敗北感濃厚。事前の市場調査なくしては、成功は期し難く、一応は合気道四段も、何の役にも立たず仕舞い。スペインと南米世界の裏表に通じる、百戦錬磨の矢島先生ご夫妻には、まことに筆舌に尽くせぬお世話になりました。改めて感謝を込めて拙文を捧げます。